



# 日本植物分類学会 ニュースレター

\*\*\*\*\*

No. 43

Nov. 2011

## 今号のトピックス

次回大会(2012年3月, 大阪学院大学)の参加・発表申込受付が始まりました  
(発表申込〆切は1月20日)

学会講演会は12月17日(土)に開催されます(於:大阪学院大)

「第18回国際植物学会議(メルボルン)で変更された発表の要件:  
電子発表の意味するところ」の邦訳記事があります



## 目次

### 諸報告

2011年度野外研修会実施報告 .....	2
野外研修会(北海道)に参加して .....	3
庶務報告 .....	4

### お知らせ

2011年度日本植物分類学会講演会のお知らせ .....	4
日本植物分類学会第11回大会および2012年度総会のご案内 .....	6

### 寄稿

新潟県のユビソヤナギ探訪記 .....	9
「第18回国際植物学会議(メルボルン)で変更された発表の要件: 電子発表の意 味するところ(Changes to publication requirements made at the XVIII International Botanical Congress in Melbourne: what does e-publication mean for you. Knapp, S., McNeill, J. & Turland, N.J. Taxon 60: 1498-1501, 2011)」の紹介と日本語訳 .....	12
書評 .....	18
日本植物分類学会第11回大会「発表・参加申込書」 .....	19
会員消息 .....	20



## 諸報告

### 2011 年度野外研修会実施報告

東 隆行(北海道大学植物園)

2011 年度の野外研修会は、初めての北海道での開催となりました。7月8日～10日の日程で、樽前山で高山植物の観察、定山溪の針広混交林で植物観察、札幌近郊の八剣山で岩崖植物の観察を行い、2ヶ所の趣の異なる温泉をお楽しみいただきました。

1日目は予定通り13時に新千歳空港に集合しました。羽田発の便がやや遅れたものの、その後の行程に影響はありませんでした。乗り場に到着したバスは予想に反して大きく、ゆったりと座ることができました。1時間ほどで樽前山登山口に到着しましたが、あいにくの霧雨でありました。ウコンツギががく片の残った独特の形の実をつけており、皆さん興味を引かれたようでした。雨具を着ての登山となりましたが、健脚の久米修さんはすいすい登られていかれました。登山道沿いにヤマブキショウマの白い花があちこちに咲いていました。晴れた日には支笏湖が望める砂礫地まで来ましたが、残念なことに霧で全く見えませんでした。雨露のついたタルマイソウ(イワブクロ)の花が綺麗に咲いており、皆さん思い思いに写真を撮っておられました。ウラジロタデやシラタマノキの他、湿地でもないのにモウセンゴケが生えていたのを藤井伸二さんが気にしておられました。頂上に近づくとつれ風が強くなり、大岩を目印に引き返すことにしました。

バスに戻って1時間ほどで長沼温泉に着きました。こじんまりした一軒宿で温泉も充実しており、思いのほか好評でした。夕食会では長谷川義人



写真 1. 集合写真(田村実氏提供)

さんが論文の別刷りを配って下さいました。スライドショーで国後島や北海道の山で撮った写真を紹介し、何とか盛り上げることができ、お酒を召されない宇那木隆さんや片桐丘充さんも満足された様子でした。翌朝はバスの時間まで付近を散策して植物を観察する方もおられました。

2日目はバスで2時間ほど走り、目的地の定山溪に向かいました。途中、3日目に登る予定の八剣山が窓から見え、荘厳な姿に登るのを心配された人もいたようでした。途中の冷水トンネルから先は一般車両の乗り入れが禁止されているので、電気バスに乗り換えて豊平峡ダムまで行き、そこで記念撮影を行いました(写真1)。晴れ間も見えまずまずの天気になったので、芝生に座って昼食を取った後、ミズナラとトマトツギが混じる針広混交林の中を林道沿いに歩いて観察を始めました。エゾクガイソウやツルアジサイが咲いており、アカイタヤが立派な実をつけていました。北海道では普通の植物ですが、皆さん新潟県や関東以西、四国や九州からも来られており、熱心に観察しておられました。特にアキタブキの大きさに興味をもたれたようで、布施静香さんをスケールにして写真を撮っていました。蚊が非常に多かったのですが、田村実さんなどは携帯用の蚊取り線香をたいていて感心しました。斜面にナンブソウを発見して興奮が最高潮に達し、そこで目安の時間になったので引き返しました。帰りにはダム湖の上部にヤナギトラノオが生えていて、西野友子さんや中村建爾さんが夢中で写真を撮っていました。

電気バスから貸し切りバスへ乗り継いで、定山溪温泉に到着しました。ホテルでは従業員や女将が出迎えており、採取で汚れた服装の私たちに少々驚かれた様子でした。夕食会では中村直樹さんに乾杯の音頭をお願いし、橋本光政さんが世界の珍稲8種で作った「八彩米」をスライドショーで説明して下さい、昨日に続いて盛り上がりました。修学旅行のような大人数部屋だったので、差し入れていただいたお酒で2次会も始まりました。

3日目は早い時間に出発し、バスで八剣山の

南口に向かいました。朝方まで雨が降った影響で、登山口からすぐの急峻な山道はぬかるみましたが、全員無事に登ることができました。登山道にスゲが多かったため、織田二郎さんは興味をひかれてなかなか前にすすまれませんでしたが、それでもようやく岩場にさしかかると、雲が晴れてすばらしい眼下の景色が見えました(写真 2)。エゾノキリンソウ



写真 2. 八剣山にて(著者撮影)

やエゾマンテマ、ミヤマラッキョウが咲いており、チャボカラマツが小さな実をつけていました。頂上に登られた方も、観察に興じられた方もおられました。皆さん満足された様子でした。帰りにキヨスミウツボが咲いているのを教えてもらい、またひとつ勉強になりました。バスの中で 3 日間の日程の中でどこが一番よかったか訊いてみたところ、初日に訊いた期待度で最も低かった八剣山に多くの手があがったのが印象的でした。しめのあいさつをした後、北大植物園前で下車し、空港に向かわれる方を見送って解散となりました。

今回は参加者 13 名のこじんまりとした研修会でしたが、皆さん楽しく交流された様子で、私も幹事として嬉しく思いました。後半は天候にも恵まれ、全体的にはよい研修会であったと思います。立案から計画まで快く相談に乗っていただいた中井秀樹さんと、北海道までお越しくださりとともに楽しく過ごしていただいた参加者の皆さまに感謝いたします。

## 野外研修会(北海道)に参加して

織田 二郎

関空から千歳空港に着くと、すでに常連の神奈川の長谷川さんらが先着されており、早速談笑の輪に入れていただいた。長谷川節は健在で、これを聞くと、分類学会の研修会に参加した実感が湧いてくる。集合場所に 1 時に集まり、あいにく雨天であったが、ゆったりの貸し切りバスでの出発である。

初日は樽前山での高山植物観察であった。目玉はイワブクロ(別名タルマイソウ)である(写真 1)。ゴマノハグサ科の草本で、やや毛深い薄紫の大き



写真 1. イワブクロ

な花が雨にぬれて神秘的であった。その他にもイソツツジ、ウコンウツギ、マルバシモツゲなどが火山性の溶岩砂礫地をけなげに飾っていた。宿は長沼温泉で風呂は大きくゆったりし、夕食寸前まで露天風呂で井戸端会議ならぬ湯ばた会議で盛り上がった。宿内は素足というのが、はじめ違和感があったが次第に大変心地よくなりなかなかよかった。夕食後はパソコンやプロジェクターを持参した東さんから好天時の樽前山の景色などを見せていただいた。

2 日目は定山溪をせき止めて定山湖を形成する豊平峡ダムへ。冷水トンネル入り口で貸切バスから専用の電気自動車に乗り換えて向かった。ダム湖周辺は国立公園内であるが、特別に許可を得ているので指定植物以外は自由に採集してよい、とのことで我々も張り切った。しかし、雨上がりの大量の蚊の来襲には参った。それでも、「ここでくじけてなるものか」とどンドン森の奥へ入って行き、チシマアザミ、エゾノレイジンソウ、ナンブソウなどを楽しんだ。北海道は大型の草本が多く、今回もヨブスマソウ(写真 2)、エゾイラクサなど大型の草本をがんばって標本にした。兵庫県博の布



施さんがでっかいアキタブキのそばでモデルになり、我々は撮影会よろしくならんでシャッターを切った。ダム崖にミヤマトウキが生えていると、準備よく双眼鏡を持参した人間環境大の藤井さんが教えてくださったが、とても手の届くところでなかったのが残念だった。帰る間に香川県の久米さんがダム湖のノリ面でヤナギトラノオを見つけてくださり、はじめて見た私は蚊のことも忘れ満足して宿に向かった。宿はあの有名な定山溪温泉で、風呂は湯船がいくつあるか分からないくらい広く、バリエーションを楽しませてくれた。その豪華さに驚くとともに、廉価での宿泊を可能にいただいた東さんのご尽力が偲ばれた。男衆は2部屋に分かれていたが、夕食後に1つ部屋に集まり遅くまで地ビールを味わいながらのミーティング？が続いた。

3日目は八剣山という山に挑戦である。「それほど有名な山ではないが面白い」と東さんから聞



写真2. ヨブスマソウ

いていたので楽しみであった。登り始めると大変な傾斜でしかも雨上がりで滑り、山登りだけを(危険を)楽しむ人が登る山のようなのである。しかし、頂上付近の崖にさしかかると、はじめて見る植物が次々と出迎えてくれて感激であった。チャボカラマツ、エゾノキリンソウ(写真3)、エゾノカワラマツバ、アサギリソウ、ミヤマラッキョウ、イワヨモギなど岩壁という環境と合わせて大変素晴らしかった。名前のわからないスゲも1種あったが、適期を過ぎていたので再度訪れてみたいと思ったことであった。頂上の手前で大峰山の修験道よろしく身を乗り出したら怖くなり、それ以上進めなくなって、山頂での記念写真に加われなかったのが心残りである。



写真3. エゾノキリンソウ

午後は、時間のある人は北大植物園を見学できるということであったが、私を含めて4名は空港に向かった。今回の観察会は3日間それぞれの観察地の個性が全く異なり、好評だった八剣山を最後に配置した東さんの構成の巧みさと宿の選定等での御苦勞に深く感謝した3日間であった。本研修会がいつまでも続くことを願う次第である。

## 庶務報告(2011年8月~10月)

庶務幹事 西野 貴子

・日本学術協力財団より依頼のあったデータベース「学会名鑑」のための調査票に回答した。

## お知らせ

### 2011年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 岡崎 純子

2011年度の日本植物分類学会講演会を次のとおり開催します。なお、会場は大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただきます。

【日時】 2011年12月17日(土) 午前10時～午後5時

【講演会場】 大阪学院大学 2号館地下1階2号教室(02-B1-02 教室)  
〒564-8511 大阪府吹田市岸部南2丁目36番1号(電話:06-6381-8434)

【プログラム】

- 10:00-10:05 ご挨拶  
10:05-11:05 角野 康郎 「日本の絶滅危惧水草をめぐって」  
11:15-12:15 東 浩司 「日本産セリ科植物の系統分類」  
(12:15-13:20 昼食)  
13:20-14:20 木場 英久 「イネ科の小穂形態の基礎」  
14:30-15:30 山住 一郎 「シダの無配生殖と無胞子生殖—多様性を生む生殖法—」  
15:40-16:40 狩山 俊悟 「岡山県の植物と岡山県植物誌への取り組み」

【その他】

参加費は無料です。事前申し込みは必要ありません。

講演会終了後、大阪学院大学職員食堂(17号1階)で懇親会(有料、学生割引あり)を行います。懇親会への出席は当日の午前中に会場受付で申し込みをお願いします。

【会場までのアクセス】

JR 東海道本線岸辺駅あるいは阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩5分。  
[http://www.osaka-gu.ac.jp/p\\_student/index.html](http://www.osaka-gu.ac.jp/p_student/index.html)の「交通アクセス」と「キャンパスマップ」をご覧ください。

【講演要旨(執筆は各演者)】

「日本の絶滅危惧水草をめぐって」 角野 康郎 (神戸大学大学院理学研究科)

日本産水草の40%以上がレッドリスト種になっているが、調査の遅れ、分類の見直し、外来種の増加などにより現状が不明の種が少なくない。このような種の実態を中心に、日本の水草の最近の状況を紹介する。

「日本産セリ科植物の系統分類」 東 浩司 (京都大学大学院理学研究科)

日本に分布するセリ科セリ亜科30属約60種について、最近の分類体系(Ohba, 1999とYamazaki, 2001)の相違点や種レベルの分類学的問題点を整理し、葉緑体および核 ITS 領域の分子系統解析の結果から、これらの問題について考察する。

「イネ科の小穂形態の基礎」 木場 英久 (桜美林大学自然科学系)

イネ科植物を同定するときには、護穎や包穎といった特殊な形態用語を理解している必要がある。しかし、これを理解すれば、イネ科はたくさんの種が身近に見られるので、相同な部位を比較して、多様な種に共有されている法則性や、痕跡器官を見つけたりする楽しみがある。

「シダの無配生殖と無胞子生殖—多様性を生む生殖法—」 山住 一郎 (大阪府教育センター)

有性生殖系のシダが無配生殖や無胞子生殖を行うと倍数性の異なる胞子体が形成される。さらに、これらの中で交配がおこると新たな倍数体が形成される。培養条件下でこれらの現象が確認できるが、自然下においても同様の現象によりシダの遺伝的多型が生まれていると考えられる。

「岡山県の植物と岡山県植物誌への取り組み」 狩山 俊悟 (倉敷市立自然史博物館)

岡山県中部の吉備高原には石灰岩地や小湿地が点在し、多くの希産種や隔離分布種が知られている。これらを含め、岡山県から新種記載された植物や岡山県を中心に分布する植物、岡山県の絶滅危惧植物などを紹介する。また、岡山県植物誌発刊に向けた取り組みも紹介する。

なお、前号のニュースレターでお知らせした分類学会講演会の予定講演者狩山俊悟氏のお名前が誤っておりました。謹んでお詫び申し上げます。

## 日本植物分類学会第 11 回大会および 2012 年度総会のご案内

第 11 回大会準備委員会

日本植物分類学会第 11 回大会を以下のように開催します。

〔本会場〕 大阪学院大学 大阪府吹田市岸部南 2 丁目 36 番 1 号  
2 号館 B1-02 教室 (口頭発表・総会・受賞記念講演・公開シンポジウム)  
2 号館 1 階アトリウム (ポスター発表)  
JR 東海道線岸辺駅あるいは阪急京都線正雀駅から大会会場まで徒歩 5 分。  
詳しいアクセスは大学ホームページ参照  
[http://www.osaka-gu.ac.jp/campus/cl\\_frame/access\\_index.html](http://www.osaka-gu.ac.jp/campus/cl_frame/access_index.html)

〔各種委員会会場〕 京都大学 京都市左京区北白川追分町  
理学部 2 号館 (編集委員会, 評議員会)

〔日程〕 2012 年 3 月 22 日(木)～3 月 25 日(日)  
3 月 22 日(木) 午後 編集委員会, 評議員会(於: 京都大学)  
3 月 23 日(金) 午前 口頭発表(大会発表賞エントリー者)  
午後 口頭発表, ポスターセッション  
3 月 24 日(土) 午前 口頭発表・ポスターセッション  
午後 総会, 受賞記念講演  
夜 懇親会(場所: 大阪学院大学学生食堂)  
3 月 25 日(日) 午前 口頭発表  
午後 公開シンポジウム

〔お問い合わせ先〕 〒669-1546 三田市弥生が丘 6  
兵庫県立人と自然の博物館 高橋 晃  
Tel. 079-559-2001 Fax. 079-559-2019  
E-mail: [jsps@hitohaku.jp](mailto:jsps@hitohaku.jp) (大会専用)

### 〔発表の要領〕

#### ○口頭発表(一般講演)

発表時間は、講演 12 分、質疑応答 3 分の計 15 分です。発表は、会場備え付けの設備(液晶プロジェクターに接続した WindowsXP, MacOS10.2 各 1 台)を使用した MS PowerPoint による発表に限定させていただきます。プレゼンテーションのためのファイルは MSPowerPoint 2003(Windows)または 2004(Mac)で読み込み可能なものとします。ファイルは名前を「プログラム番号+演者フルネーム」とし、USB フラッシュメモリに保存してご持参下さい。ファイルの受付は会場で行います。ファイルの受付時間につきましては、プログラムの確定後に各発表者に大会準備委員会よりお知らせいたします。

#### ○ポスター

ポスターは、横 90cm×縦 120cm 以内の大ききで作成ください。貼付用テープ等は大会準備委員会で用意します。23 日 13 時までには貼り付けを終えてください。会場の都合上、24 日 15 時までにはポスターの撤去をお願いします。

### 〔発表・参加申込方法〕

大会には日本植物分類学会会員・非会員を問わず参加していただけますが、発表者のうち演者(口頭およびポスターで実際に発表する方)は特に依頼した場合を除き会員に限ります。非会員の講演者は、発表までに日本植物分類学会への入会手続きをしてください。

発表・参加申し込みに関しましては、できるだけ電子メールでの申込をお願いします。学会 HP (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/cgi-bin/jsps/wiki/wiki.cgi>)に掲載されている 11 回大会案内に、発表・参

加申込み書へのリンクが張られていますので、そこから用紙をダウンロードし必要事項を記入の上、タイトルを「学会申込」として第 11 回大会専用アドレス [jsps@hitohaku.jp](mailto:jsps@hitohaku.jp) 宛に添付ファイルとして送信してください(添付ファイル名は参加者本人のフルネームをお使いください)。

送信してから 3 日間経っても(土日月・祝日を除く)大会準備委員会から受信の返事がない場合は、タイトルを「学会申込再送信」とした上、同じメールを送信してください。

電子メールを利用できない方は、本ニュースレター案内の最後に掲載されている「発表・参加申込書」に従って必要事項を記入の上、大会準備委員会あてに郵送またはファックス(079-559-2019)でお送り下さい。郵送の場合、締め切り日にご注意ください。

#### 〔大会発表賞へのエントリー〕

大会発表賞(口頭発表賞またはポスター発表賞)にエントリーされる方は、「発表・参加申込書」9.口頭発表賞・ポスター発表賞へのエントリーの項目で、(1)する、を選択してください。エントリーされた方の発表様式に応じて、自動的に口頭発表賞、ポスター発表賞それぞれの候補者として割り振られます。なお、大会発表賞へのエントリー資格のある方は、日本植物分類学会の会員で、パーマメント・ポストに就いていない若手研究者(ただし年齢制限はありません)で、筆頭発表者かつ演者である方本人です。

#### 〔発表要旨〕

発表要旨の原稿は、MS(マイクロソフト) Word 2003(Windows)または MS Word 2004(Mac)で読み込み可能な形式で保存して下さい。

左右は 2cm, 上下は 3cm の余白を取り、A4 判の用紙 1 枚に 12 ポイント以上の MS 明朝あるいは MS ゴシックのフォントのみを用いて、34 行以内でタイプしてください。発表題目、1 行空白、発表者氏名(かっこ内に所属)、発表者氏名(英語)、1 行空白、要旨本文の順に記入し、実際に発表する演者の右肩に「\*(半角)」を入れてください。黒 1 色の図や表を入れることは可能ですが、グレースケールの写真等は使えません。パソコンの機種に依存する特殊文字は、フォントの文字化けなどをおこすので使えません。

原稿のファイルは、「発表要旨」とタイトルをつけた電子メールの添付書類(代表申込者の名前全体をファイル名としてください)として、大会参加申込みとは別に [jsps-yoshi@hitohaku.jp](mailto:jsps-yoshi@hitohaku.jp) (メールアドレスが参加・発表申込みと異なりますのでご注意ください)宛に送信してください。あるいはファイルの入った CD-R を下記住所まで郵送してください。

送信してから 3 日経っても(土日月・祝日を除く)大会準備委員会から受信の返事がない場合は、お手数ですがメールのタイトルを「発表要旨再送信」とした上、同じメールを再度送信してください。

なお、印刷の都合で体裁を変更する場合がありますのでご了承ください。MS ワードを使って要旨原稿ファイルを作成することが困難な発表者の方がいらっしゃいましたら、事前に大会準備委員会までご連絡下さい。要旨の作成方法をご相談させていただきます。要旨の FAX による送付は受け付けません。

#### 〔大会参加・発表申込の送付先・締め切り 担当 高野温子〕

送付先: 〒669-1546 三田市弥生が丘 6  
兵庫県立人と自然の博物館 高野温子  
E-mail: [jsps@hitohaku.jp](mailto:jsps@hitohaku.jp) Fax: 079-559-2019

発表者:

発表申込／大会・懇親会・昼食代等 参加費振込 1 月 20 日(金)必着

発表者以外:

参加申込／大会・懇親会・昼食代等振込 2 月 24 日(金)必着  
1 月 20 日までの振り込みは、参加費が割引になります。

#### 〔要旨原稿の送付先・締め切り 担当 秋山弘之〕

送付先: 〒669-1546 三田市弥生が丘 6  
兵庫県立人と自然の博物館 秋山 弘之  
E-mail: [jsps-yoshi@hitohaku.jp](mailto:jsps-yoshi@hitohaku.jp) (参加・発表申込み先とは異なります。)  
E-mail, CD-R 郵送 共に 2 月 3 日(金)必着。

## 〔参加費送金先〕

郵便振替口座番号:00990-4-322631

口座名義:日本植物分類学会第11回大会準備委員会

送金には同封(または郵便局備え付け)の振替用紙を使用し、必ず振り込み金額の内訳(大会参加費、懇親会費、24日弁当代等)と、払込者と参加者が異なる場合は参加者の所属・氏名を通信欄に記入してください。

## 〔宿泊施設〕

大学の所在地は吹田市ですが、JR大阪駅から30分以内で到着します。JR大阪駅周辺には宿泊施設がたくさんありますので、各自でご予約下さい。

## 〔託児について〕

3月23-25日、大阪学院大学内に託児室を開設します。ご利用は事前にお申込みいただいた方に限ります。利用希望者は、大会参加申込み時に利用希望人数、2012年3月時のお子さんの年齢、及び利用希望日をお知らせください。詳細は個別にご連絡いたします。

## 〔大会会場へのアクセス〕

新幹線新大阪駅・JR大阪駅から:JR東海道線で約10分

関西国際空港から:JR特急はるかて新大阪駅到着後、普通電車で乗り換えて岸辺駅へ。約1時間

大阪空港から:大阪モノレールで南茨木駅、阪急京都線に乗り換えて正雀駅。35分

大学構内への自家用車の乗り入れはできません。

## 〔参加費〕

大会参加費(発表要旨集1部代金を含む):

1月20日までに振込	一般 4000円	学生 2000円
1月21日以降振込	一般 5000円	学生 3000円
当日参加申込の場合	一般 5000円	学生 3000円
追加発表要旨集	1部 1000円	

懇親会参加費:

1月20日までに振込	一般 6000円	学生 4000円
1月21日以降振込	一般 7000円	学生 5000円
当日参加申込の場合	一般 7000円	学生 5000円

3月24日昼食弁当 700円

弁当は予約制です。参加申し込みの際に一緒に申込みください。

## 〔昼食〕

3月23日:学内に学生食堂が2ヶ所、コンビニエンスストア、カフェテリアが2ヶ所あります。岸辺駅・正雀駅周辺にも飲食店がありますのでご利用ください。

3月24日:日中は学生食堂が営業しませんので、学外の飲食店をご利用いただくか、弁当(700円)を用意しますので、参加申込み時にあわせて申込みください。

3月25日:各自ご用意ください。

## 〔公開シンポジウム〕

日時: 3月25日13時00分~16時00分

タイトル:「市民とともに~地域の植物研究での連携と成果」

植物分類学の分野では、伝統的に研究者と地域の研究者とともに調査研究を行ってきましたが、近年の市民活動の広がりを受けて、研究者と市民とのさまざまな連携が行われています。今回のシンポジウムでは、西日本で、研究者と市民が連携した調査研究や保全活動の事例をとりあげ、植物分類学と市民との多様な関わりを紹介します。



## 寄稿

## 新潟県のユビソヤナギ探訪記

吉山 寛 (吉山雑種柳観察園)

まえがき

ユビソヤナギ *Salix fukaoana* Kimura は 1972 年群馬県湯檜曾川で発見され、自生地はここだけと思われたが、最近になって宮城・岩手・秋田・山形の各県から新分布が次々に報告されている。特に福島県では只見川水系伊南川の自生は規模が最大である。

ユビソヤナギは多雪地の礫の多い河原に近い所に自生するため、同様な自然環境の有る新潟県にも分布すると信じていた。10 年ほど以前にバスツアーで平ヶ岳 (2141m) に登った帰り、銀山平の伝之助小屋の脇に直立した大きな柳の一群があったのを記憶していて、もしやあれはユビソヤナギではないかと気になっていた。今回ようやく協力者に恵まれて、2011 年 6 月から 7 月にかけて 2 回訪れることができた。銀山平は新潟県北魚沼郡湯之谷村 (現在は魚沼市) のかなり山奥にある。

銀山平は江戸時代に銀鉱の採掘が盛んに行なわれ、当時は数万人も人が住んでいたそうだが、今は奥只見湖の船着場と、人家が点在する谷中平野で、シーズンオフは至って静かな桃源郷だ。銀山平に入るルートは、関越自動車道の小出インターから国道 R352 号 (小出からはもう 1 本、只見町に至る R252 号があり番号が似ていてまごつく) を利用するのだが、途中で枝折峠が有るため 6 月中旬まで閉鎖になる。その場合はシルバ

ーラインと名付けられた長大なトンネルのかなり行ったところで右に抜け出ると銀山平だ。もう 1 つのルートは尾瀬国立公園を貫く R352 号から入る方法がある。銀山平を地形図で探すなら、5 万分の 1 なら「八海山」、2 万 5 千分の 1 なら「尾瀬ヶ原」の 2 枚北の「奥只見湖」の中央部分だ (図 1)。以下は新潟県のユビソヤナギ探しの記録である。

銀山平 その 1 (6 月 9 日)

伝之助小屋 (小屋と云っても実質は旅館) の右脇に 6 本の柳の大木が立っている (図 2)。主人に尋ねると、「オノエヤナギときかされている」と云う。手近の 1 本は根元から萌芽していてすぐオノエヤナギと同定できる。2 本目の枝を採って見ると、何と果序が付いて、ユビソヤナギの可能性が大きい。葉の展開が不十分なため、盛夏に再び来る事を約束して小出に戻り、R252 号で只見町へ行き 2 泊してユビソヤナギの雑種を調べて帰った。

銀山平 その 2 (7 月 19 日)

6 本の柳の位置関係、胸高周囲、樹高を調べ、枝の採取のために、ロープ・杭・巻尺と 3 本継ぎの高枝鎌を持参した。調査結果は次の通りである (表 1)。樹高は 3 本継ぎのパイプを基に写真判定で、最高 18m あった。筆者の見た限りではユビソヤナギとしては最高と考えられる (図 3, 4)。

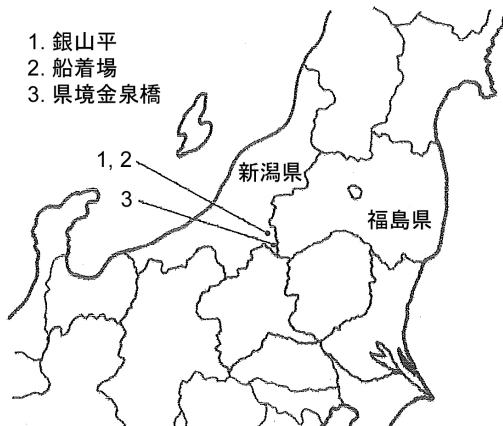


図 1. ユビソヤナギ群落位置図

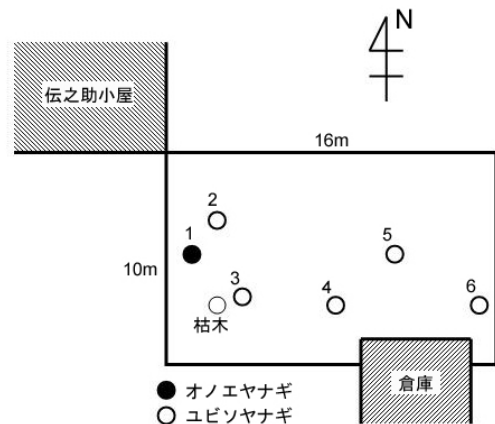


図 2. ユビソヤナギ群叢位置図

表 1. 各個体の特徴。

株番号	1	2	3	4	5	6
樹種	オノエ ヤナギ	ユビソ ヤナギ	ユビソ ヤナギ	ユビソ ヤナギ	ユビソ ヤナギ	ユビソ ヤナギ
胸高周囲 (cm)	123	130	165	156	172	180
特徴	根元から 萌芽	鋸歯が 目立つ	そばに 枯木	葉幅が やや広い	樹高 最大	葉幅が やや広い

小屋の主人によると、この林は自然の物だと云う。この附近にはこのような大木は見られないので大切に残してほしいと伝えた。

#### 船着場(同日)

奥只見湖の船着場の駐車場に続く草地を隈なく探した。オノエヤナギの幼木ばかりが連続し、僅かにイヌコリヤナギが混じっている。一巡して終りかけた頃、低木で枝が紫黒色の1群が見えた。葉を調べるとユビソヤナギだ。これで2番目のユビソヤナギの確認だ。

#### 県境金泉橋(7月20日)

先月只見町に寄った際、「只見の自然に学会」の新国勇氏から、「只見川の対岸の柳林がユビソヤナギのようだ」と聞かされた。只見川の源流部は川が福島・新潟両県の境になっている。R352号が只見川に架かる橋は金泉橋1つしかない。銀山平から延々と等高線のように曲がりくねった国道を走って金泉橋に到着した。川の上

下・兩岸を見ても柳林は無い。橋を渡って桧枝岐村をいきつ戻りつしたが川へ容易に降りられそうもない。降りたとしても対岸つまり新潟県側に渡れる可能性も無い。

あきらめて銀山平に戻ることにしたが100mも行かない右手に工事用の道路があった。歩を進めて行くと、只見川の河原よりも一段高い旧河床に柳林があった。よく見ると、これもユビソ、あれもユビソ、まさにユビソヤナギの純林だ。ここは只見川の左岸イコール新潟県のユビソヤナギの広大な林だ。幅30m位、延長は少なくとも数百mは有りそうだ。平均的な樹高は5m、直径は8cm位のものが多い。ここは国道から見えないため人に気付かれなかったのだろう。開花期に来たいが、国道閉鎖で30kmも残雪を踏んで来る元気は無い。しかしここが3個所目の自生地の発見だ。どこまで続くか調べたかったが帰る時刻が迫っているため断念した。



図3. ユビソヤナギ。  
A: 雌果序, 株  
No.2(6月9日)。  
B: 枝葉, 同株(7  
月20日)。

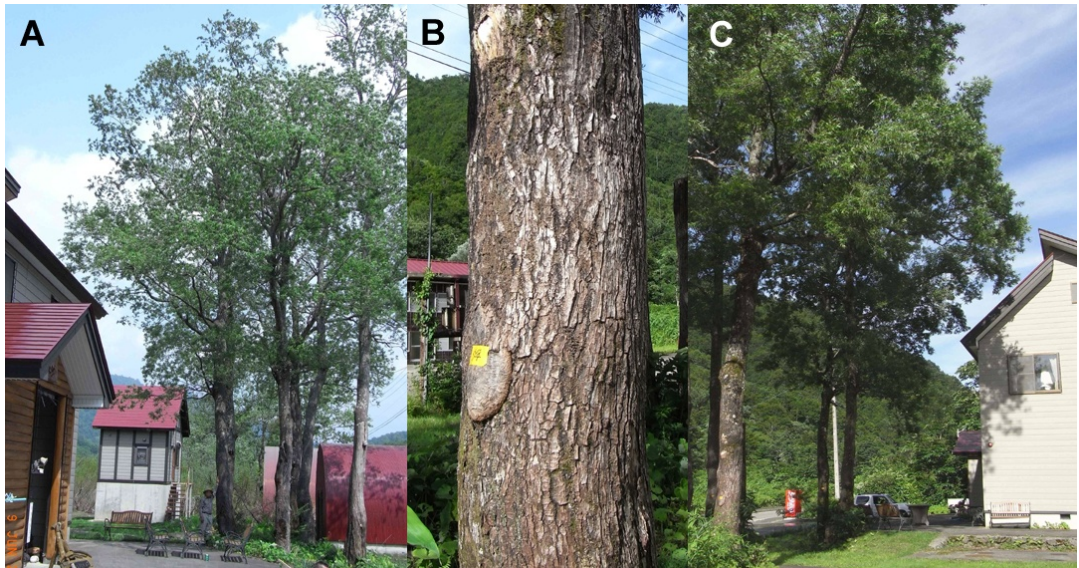


図 4. A: 伝之助小屋(左側)との位置関係。B: 樹皮(No.2)。C: 樹高を測る。株 No.5。中央の白い棒は 6m, 建物は 10m。

#### 結論

今回の調査で、新潟県にユビソヤナギの自生が確認できたが、考えてみればこの地域は只見川水系なので、ユビソヤナギが自生して当然であり、新分布地の発見と云える程の調査では無いが、県別フロラの一資料として、また県内の別な水系にも自生の可能性を探る研究者の出現など有意と思いきや報告した次第である。

今回の教訓: 植物調査はあきらめてはダメだ。

#### あとがき

このユビソヤナギの樹高は、筆者の知る限りでは日本一を誇るもので、銀山平の原植生を今に残すものとして、樹叢ごと市か県の天然記念物に

指定の価値があると見ている。

今回の調査では次の方々にお世話になった。厚く御礼申し上げる。

伝之助小屋の佐藤邦雄氏、「只見の自然に学ぶ会」の新国勇氏、調査に同行してくれた荒川幹夫氏。

吉山 寛 (Yoshiyama, Hiroshi)

吉山雑種柳観察園

〒193-0842

東京都八王子市西浅川町 157-26

## 会費納入の季節です！

- ・会費は前納制です。2012 年度会費は今年 12 月末日までに納入する必要があります。
- ・適正な学会運営のために、会費納入をよろしくお願いします。
- ・本ニュースレターの送付宛名の右下に、例えば「納済年度:2010」とありましたら、2011 年と 2012 年の 2 カ年分の会費をお納めください。  
(金額、振込先は最後ページをご覧ください)
- ・なお、長期滞納者に対しては、規約第 10 条(2)に基づき、除名を行っております。
- ・ご不明の点があれば、会計幹事までご連絡ください。

**「第 18 回国際植物学会議(メルボルン)で変更された発表の要件: 電子発表の意味  
するところ(Changes to publication requirements made at the XVIII International  
Botanical Congress in Melbourne: what does e-publication mean for you. Knapp, S.,  
McNeill, J. & Turland, N.J. *Taxon* 60: 1498–1501, 2011)」の紹介と日本語訳** ——

仲田 崇志 (慶應義塾大学先端生命科学研究所)

永益 英敏 (京都大学総合博物館)

大橋 広好 (東北大学植物園津田記念館)

国際植物命名規約(*International Code of Botanical Nomenclature*: 今回, *International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants* へと変更された)は 6 年ごとに開かれる国際植物学会議の場で定期的に改正されている。最新の規約改正は 2011 年 7 月に開かれたメルボルン会議の場で採決され, 改正版(メルボルン規約)は 2012 年の半ば頃に出版される見込みとなっている。メルボルン会議で採決された改正は非常に大きなもので, 特に影響の大きい変更としては, 1) 電子出版のみでの出版が有効発表として認められること, 2) ラテン語だけでなく英語による記載文または判別文も正式発表の要件として認められること, そして 3) 菌類の新分類群の正式発表の要件として新たに学名の登録が加わったこと, が挙げられる。

これらのうち 1)と 2)の条項はメルボルン規約出版に先立つ 2012 年 1 月 1 日より発効するため, 急ぎ周知する必要がある。今回訳出した Knapp *et al.* (2011)は, 特に電子出版に関する条項を中心に改正点を解説したもので, *Taxon* 誌を初めとする多数の雑誌に英文が掲載されており, Creative Commons Attribution License の下での利用が認められている。また, 中国語, ポルトガル語, ロシア語, およびスペイン語への翻訳も現在進められている。我々は, 本論文の邦訳を複数の邦文誌に掲載し, メルボルン規約の周知に役立てたいと考えている。日本語への翻訳にあたっては, メルボルンでの命名法部会の議長を務めた第一著者の Knapp 博士からも承認と激励のメールをいただいた。

今回の翻訳では規約条文の草稿や重要な用語も訳出されているが, これらは暫定的なものであり, メルボルン規約の正式な翻訳は規約出版後に日本植物分類学会の命名規約邦訳委員会によって出版される予定である。

なお, 詳細な規約の改正点や他の重要な変更については, *Taxon* 誌にいくつかの解説が掲載されているため, そちらも参照して頂きたい(Knapp *et al.*, 2011; McNeill & Turland, 2011; McNeill *et al.*, 2011; Smith & Figueiredo, 2011; Smith *et al.*, 2011)。

## 文献

- Knapp, S., McNeill, J. & Turland, N.J. 2011. Changes to publication requirements made at the XVIII International Botanical Congress in Melbourne — what does e-publication mean for you. *Taxon* 60: 1498–1501.
- McNeill, J. & Turland, N.J. 2011. Major changes to the Code of Nomenclature — Melbourne, July 2011. *Taxon* 60: 1495–1497.
- McNeill, J., Turland, N.J., Monro, A.M. & Lepschi, B.J. 2011. XVIII International Botanical Congress: Preliminary mail vote and report of Congress action on nomenclature proposals. *Taxon* 60: 1507–1520.
- Smith, G.F. & Figueiredo, E. 2011. Conserving *Acacia* Mill. with a conserved type: What happened in Melbourne. *Taxon* 60: 1504–1506.
- Smith, G.F., Figueiredo, E. & Moore, G. 2011. English and Latin as alternative languages for validating the names of organisms covered by the International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants: The final chapter. *Taxon* 60: 1502–1503.

## 第 18 回国際植物学会議(メルボルン)で変更された発表の要件: 電子発表の意味 するところ

**Sandra Knapp (Department of Botany, The Natural History Museum, U.K.)**

**John McNeill (Royal Botanic Garden, Edinburgh, U.K.)**

**Nicholas J. Turland (Missouri Botanical Garden, U.S.A.)**

訳: 仲田 崇志, 永益 英敏, 大橋 広好

国際植物命名規約 (*International Code of Botanical Nomenclature*) は、国際植物学会議 (International Botanical Congress: IBC) の命名法部会で 6 年ごとに変更されている。第 18 回 IBC はオーストラリアのメルボルンで開催され、命名法部会が 2011 年 7 月 18 日から 22 日に開かれ、その決定が 7 月 30 日の本会議にて採択された。この会議の結果、新学名の発表に影響するいくつかの重要な規約変更が行われた。このうち二つの変更はメルボルン規約の出版より数ヶ月早く、2012 年 1 月 1 日から発効する。国際標準逐次刊行物番号 (ISSN) または国際標準書籍番号 (ISBN) を伴って Portable Document Format (PDF) の形式でオンライン発表された電子資料は有効発表となり、新分類群の学名に対する要件であるラテン語の記載文または判別文は、ラテン語または英語による記載文または判別文へと変更される。さらに、2013 年 1 月 1 日から効力をもつが、菌類として扱われる生物の新学名が正式発表されるためには、初発表文 (protologue: 学名の正式発表に際して、その学名に関連して発表された全てのもの) の中に、認定された登録機関 (例: MycoBank) の発行する識別子 identifier の引用を含まなければならなくなる。電子発表に関する新たな条項の草案を示し、最良慣行 (訳注: 最適な結果を得るための方法や手順など。Best practice) について概説する。

キーワード: 植物命名規約; 電子発表; 国際標準書籍番号 (ISBN); 国際標準逐次刊行物番号 (ISSN); ラテン語; 生命科学識別子 (LSID); MycoBank; Portable Document Format (PDF)

*International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants* についてなされた変更を普及促進するため、この記事は *B.M.C. Evolutionary Biology*, *Botanical Journal of the Linnean Society*, *Brittonia*, *Cladistics*, *MycKeys*, *Mycotaxon*, *New Phytologist*, *North American Fungi*, *Novon*, *Opuscula Philolichenum*, *PhytoKeys*, *Phytoneuron*, *Phytotaxa*, *Plant Diversity and Resources*, *Systematic Botany*, および *Taxon* に掲載される。中国語、ポルトガル語、ロシア語、およびスペイン語への翻訳も現在進められている。

### 序文

オーストラリアのメルボルンにて 2011 年 7 月に開催された第 18 回国際植物学会議において、国際植物命名規約 (今後は *International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants* と改称) に対し、2012 年 1 月 1 日より発効する二つの重要な変更がなされた。これらの変更は、この規約の下で学名を発表するあらゆる人に影響することとなる。メルボルン規約は 2012 年の半ば頃まで出版されないため、これらの変更、特に電子媒体による有効発表に関する変更 (第 29, 30 および 31 条における変更) を概説することは有用であると考える。メルボルンで採択された全ての規約変更に関する簡潔な報告は McNeill *et al.* (2011) を参照して欲しい。

そのためにここでは、編集者や出版者が有効発表に関する規約についての最良慣行を確立するための助けとなるよう、有効発表に関係する改訂された条項、付記、勧告の草稿を用意した。また新学名やタイプ選定を電子的方法で発表したい人への指針として、これらの変更が意図していないことについても概説する。読者の方々には、会議に先立って提案された変更点を含んだ、電子発表に関する特別委員会の報告 (Chapman *et al.*, 2010) を参照してほしい。この報告には、現在では規約に採用されている変更の論拠も示されている。



**改訂条項の草稿文言****第 29, 30 および 31 条および勸告 29A, 30A および 31A**

ここでは関連する全ての条項、付記および勸告(実例は除く)の文言を掲載し、変更点を下線付き太字で強調した。ここに示した文言は、メルボルン規約印刷版が最終的に決定される 2011 年 12 月の編集委員会会合までの暫定的なものである。

**第 29 条**

29.1. 本命名規約の下では、印刷物が(販売、交換または寄贈により)一般公衆に対して、または、少なくとも植物学者が広く利用できる図書室をもった植物学の研究機関に対して配布されることによって、発表 publication は有効とされる。国際標準逐次刊行物番号(ISSN)または国際標準書籍番号(ISBN)を伴ったオンライン発表物中で、Portable Document Format(PDF; 第 29.3 条および勸告 29A.1 もみよ)の形で資料が電子配布されることによっても、発表は有効とされる。公開の会合で新学名を伝達すること、公開の採集品や庭園中に学名を示しておくこと、手書きの原稿やタイプライターで打った原稿またはその他の未発表資料から作られたマイクロフィルムを発行すること、上記以外の方法で電子的に配布すること、では発表は有効とされない。

29.2. 本条項において、「オンライン」とは World Wide Web を通じて電子的にアクセス可能であることとして定義される。

29.3. Portable Document Format(PDF)が他の形式に継承されるときは、全体委員会(第 III 部をみよ)の通達する、後継の国際標準形式が受け入れられる。

29.4. 個々の電子発表の内容は、それが最初に発行された後に変更してはならない。そのようなかなる変更もそれ自体では有効に発表されていない。有効発表となるためには訂正や改訂は別途発行されなければならない。

**勸告 29A**

[現行の勸告は下記のものに置き換えられる]

29A.1. Portable Document Format (PDF)による電子的な発表は、PDF/A 記録保存標準(ISO 19005)に従うべきである。

29A.2. 著者はなるべくなら、現実的な範囲で下記の基準を満たした、記録保存される出版物に発表すべきである(勸告 29A.1 もみよ)。

(a) 資料は複数の、信用のあるオンライン・デジタル・リポジトリ(例えば ISO 認定リポジトリ)に置かれるべきである。

(b) デジタル・リポジトリは、世界の二ヶ所以上の地域、そしてなるべくなら異なる大陸に置かれるべきである;

(c) また、世界の二ヶ所以上の地域、そしてなるべくなら異なる大陸の図書館に印刷複製を納めることが望ましい。

**第 30 条**

30.1. 2012 年 1 月 1 日より前は、電子資料の配布による発表は有効発表としない。

30.2. 電子発表は、もし出版者が最終的のみならず版によって置き換えられたり、または置き換えられる予定の単なる準備版である、という証拠があるかまたは発表中に含まれているならば有効に発表されておらず、この場合、その最終版のみが有効発表となる。

30.3. 手書き印刷 indelible autograph による 1953 年 1 月 1 日より前の発表は有効である。この日付以後に作られた手書き印刷は有効に発表されていない。

30.4. 本条項において、手書き印刷とは機械的またはグラフィック印刷技術(たとえば石版印刷、オフセット、またはエッチング)によって複製された手書きの資料をいう。

30.5. 1953 年 1 月 1 日以後に商業カタログ中や科学分野を専門としない新聞紙上でなされた発表、および、1973 年 1 月 1 日以後に種子交換リスト中でなされた発表は有効発表としない。

30.6. 乾燥標本集 exsiccatae に伴う印刷物の配布は 1953 年 1 月 1 日以後は有効発表としない。

付記 1. 印刷物が乾燥標本集とは独立にも配布されていれば、それは有効に発表されている。

30.7. 1953 年 1 月 1 日以後になされた、学位を得ることを目的として大学またはその他の教育機関に提出された学位論文であると言明された逐次刊行物ではない独立した著作の発表は、その著者もしくは出版者がそれを有効発表であるとみなしているという(有効発表に必要な規約の要請に言及した)明示的な言明または他の内的証拠がない限り有効に発表されていない。

付記 2. 最初の印刷版中に国際標準書籍番号 (ISBN) がついていることや、印刷者、出版者または配布者の名前が提示されていることは、その著作が有効発表を意図したものであるという内的証拠と見なしてよい。

### 勸告 30A

**30A.1. 同じ電子発表の準備版および最終版は、それらが最初に発行される際に、そのように明示されるべきである。**

30A.2. (命名法上の新案である) 新学名と新分類群の記載文または判別文とを、いかなる種類であれ短命な印刷物で、そのうえ特に印刷部数が限られていて不定であるものに発表することを避けるように強く勧告する。そのような印刷物は永続的に存在することに関して限界があると思われ、印刷部数の点で有効発表に関して曖昧であり、あるいは一般公衆の目にふれそうもない。著者は新学名も新記載文または新判別文も通俗的な定期刊行物、抄録誌または正誤表に発表することも避けるべきである。

30A.3. 時間的にも空間的にも利用性を高めるため、命名法上の新案を発表しようとする著者は、分類学に関する論文を定期的に出版している定期刊行物に発表することをまず優先させるべきである。**さもなければ、(印刷物または電子出版物として発表されたかに関わらず) 出版物の複製をその分類群に対して適当な目録作成センターに送るべきであり、印刷物としてのみ存在する出版物は、世界中の少なくとも 10 の、できればそれ以上の、植物学に関係する、あるいは他の一般に公開された図書室に納めるべきである。**

30A.4. 著者および編集者は、要旨または摘要において命名法上の新案について言及すること、あるいは出版物の索引にそれらをリストすることが奨励される。

### 第 31 条

31.1. 有効発表の日付は、第 29 条および 30 条に規定されたように、新学名の発表されている印刷物**または電子出版物**が通用することになった日付である。別の日付を確立する証拠がない場合には、その印刷物中**または電子出版物**中に表記された日付を正しいものと受け入れなければならない。

[現行の付記 1 は下記のものに置き換えられる]

**31.2. 印刷版と電子版が並行して発行された発表は、第 31.1 条による各版の日付が異なっていない限り、同じ日付で有効に発表されたものとして扱われなければならない。**

31.3. 販売される定期刊行物や他の出版物の別刷り *separate* が前もって発行された場合には、その別刷りにつけられた日付は、それが間違いであるという証拠がない限り、有効発表の日付として受け入れられる。

**勧告 31A**

31A.1. 出版社または出版社の取扱業者が、印刷物を一般公衆へ配るために通常の運搬業者に印刷物を委託した日付を、その有効発表の日付として受け入れるべきである。

**最良慣行**

新学名の著者、編集者、および出版者は、出版物中の学名が有効に発表されるため、新学名を含む出版物がメルボルン規約に準拠していることを確認することに関心があるだろう。オンライン版を伴った雑誌、モノグラフシリーズまたは書籍に発表する人は、関係者の間で可能な限り速やかに最良慣行を確立できるように、編集者と情報交換することを勧める。多くの出版者は、しばらく前から命名法上の新案の電子発表に関わる問題について入念に検討しており(Knapp & Wright, 2010 をみよ; *PLoS One* におけるガイドライン, <http://www.plosone.org/static/policies.action#taxon>), これらの新たな規約変更を効果的に機能させることへの高い関心が窺える。

下記の幾つかの慣行は、メルボルン規約に準拠した、新規事項の電子発表の初期段階に役立つだろう:

- ・各論文が発表の日付を明確に伴うこと(多くの雑誌で行われているように。例, *New Phytologist* や *Nature*)。
- ・最終版とは同じでない(それゆえ有効発表の場とならない)オンライン先行版が発行される場合には、各論文にその事実を明確に示すこと(例, *American Journal of Botany* をみよ)。
- ・各論文に出版物の ISSN または ISBN を明確に表示することは、目録作成者が有効発表を確認する助けとなるだろう。
- ・CLOCKSS システム(説明については Knapp & Wright, 2010 をみよ)や他の国際的記録保存システムに参加している雑誌(またはモノグラフシリーズ)における発表は、長期的な記録保存を保証することになるだろう。
- ・電子的方法で新学名を発表する著者は、勧告 30A.3 で推奨されたように、適切な目録作成センターに注意喚起するべきである — これは、電子発表された学名に気づかなかったかもしれない目録作成者の役に立つだろう。

**これらの変更が意味していないこと**

新しい条項および勧告では PDF および PDF/A の用語が使われているが、これは、有効に発表されるためにはこの形式のみで発行されなければならない、という意味ではない。例えば、多くのオンライン雑誌では、PDF 版と並行して Hypertext Markup Language (HTML) 形式でも論文を発行している。しかし、そのような場合でも PDF 版が有効発表されることになる。PDF が他の形式に継承される場合に植物命名規約全体委員会が新しい国際標準形式の採用を通達できるという規定は、規約を利用する命名法上の新案の著者やコミュニティがその分野の進展について十分な知識を持ち続けられるようにするという意味と、規約が時代遅れになってしまわないようにするという意味とを持っている。

下記の方法を用いた電子発表は、メルボルン規約の下における命名法上の新案の有効発表とはならない。

- ・インターネットで利用可能な、ウェブサイトや一時的な文書中での発表 (ISSN の付与には厳格な基準がある — <http://www.issn.org>をみよ)。
- ・登録された ISSN または e-ISSN を持たない雑誌での発表。
- ・登録された ISBN または e-ISBN を持たない書籍での発表。

すべての電子発表について、その印刷物を図書館に納めることを提案する勧告は承認されたが、それは植物学者が実行することを勧めるものであっても、司書が従うべき標準的な慣行や手続きを提示しているわけではない。司書は彼ら自身が出版様式の複雑な移行期の中にある (Johnson & Luther, 2007)。そのため単一の印刷物としての論文を独立の収蔵物として受け入れることを、その分量が膨大になるだろうために、司書が喜ばないとかできないとする場面に植物学者が会うこともあるだろう。

### 学名の発表に関する他の二つの重要な規約変更

メルボルンで承認され、2012年1月1日から発効する二つ目の規約変更は、規約の管理下にあるすべての生物の新分類群の学名の正式発表において必要な記載文または判別文が、英語でもラテン語でもよいとすることである。これは化石植物の学名に対しては現行の規定であり、すべての新しい非化石分類群では、ラテン語の記載文または判別文が必要とされている (菌類と植物は1935年1月1日から; 藻類 [本規約のもとで扱うならばシアノバクテリアも含む] は1958年1月1日から)。この変更は学名の形式には影響せず、学名は引き続きラテン語であるかラテン語として扱われる。個々の雑誌がラテン語と英語のどちらを要求するかは、当然ながら雑誌の編集者によって決定される。

学名の発表に関してメルボルンで承認された三つ目の規約変更は、2013年1月1日 (Miller & *et al.*, 2011 が報告した2012年1月1日ではない) より前には発効しないが、正式発表の追加要件として、菌類として扱われる生物のすべての新学名は、初発表文の中に、認定された登録機関 (例、MycoBank, <http://www.mycobank.org/>) の発行する識別子の引用を含まなければならない、ということである。この点については別途周知される。

2013年1月1日以後、菌類の新学名に対する固有識別子の要件は、植物および藻類には適用されない; これらのグループの新学名の著者は、目録作成センターに生命科学識別子 (LSID) — または他の識別子 — を請求する必要はない。

### 謝辞

SK は NSF の Planetary Biodiversity Inventory program (DEB-0316614, ‘PBI Solanum—a worldwide treatment’) の助成を受けている。メルボルンの第18回IBCへのJMcNとNJTの出席は国際植物分類学連合 (IAPT) から一部援助された。私たちは、Katherine Challis (Kew) の有意義な意見に感謝している。

### 文献

- Chapman, A.D., Turland, N.J. & Watson, M.F. (eds.). 2010. Report of the Special Committee on Electronic Publication. *Taxon* 59: 1853–1862.
- Johnson, R.K. & Luther, J. 2007. The e-only tipping point for journals: What’s ahead in the print-to-electronic transition zone. Association of Research Libraries, Washington, D.C. (訳注: 原文では “Association of Research Librarians”)
- Knapp, S. & Wright, D. 2010. E-publish or perish, *In* Polaszek, A. (ed.), *Systema Naturae 250 — the Linnaean Ark*, p. 83–93, Taylor and Francis, London.
- McNeill, J., Turland, N.J., Monro, A.M. & Lepschi, B.J. 2011. XVIII International Botanical Congress: Preliminary mail vote and report of Congress action on nomenclature proposals. *Taxon* 60: 1507–1520.
- Miller, J.S., Funk, V.A., Wagner, W.L., Barrie, F., Hoch, P.C. & Herendeen, P. 2011. Outcomes of the 2011 Botanical Nomenclature Section at the XVIII International Botanical Congress. *PhytoKeys* 5: 1–3.

## 書評

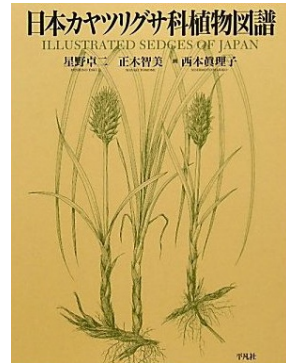
## 日本カヤツリグサ科植物図譜

星野 卓二・正木 智美／著，西本 眞理子／画 平凡社／発行 ISBN:978-4582535228  
定価:21,000 円(税込) B5 判 778 ページ

本書は、日本に分布するカヤツリグサ科植物 26 属約 500 分類群を完全に網羅した初めての図譜である。驚くべき事に、その1種1種全てについて詳細な形態情報(英訳付き)と、全体図・花序・小穂・鱗片・果包・瘦果などについての美しい線画が掲載されている。この線画が大変素晴らしく、実物以上に実物の雰囲気表現しているため、写真満載の図鑑以上に分かりやすい図譜となっている。私はつい楽しくなって、近くにあった植物の実物や図鑑の写真と何度も比較・観察をして楽しんでしまった。カヤツリグサ科は微細な形態形質を分類形質とする場合が多いため、このような美しい線画を掲載した図譜は特に有用であると思われる。また、分布情報や染色体数に加えて、分類学的な考察もノートとしてまとめられている。カヤツリグサ科といえば、私のような専門外の人間にとって究極のマニアックな植物であった。しかし、この本のおかげで、野外で「カヤツリグサの仲間」などとしばしばまとめられてしまうこの分類群の面白さの一端に触れることができたように思う。

カヤツリグサ科は湿地を中心とした様々な生育環境に広く分布し、大きく多様化した興味深い分類群である。しかしながら、その同定の難しさから研究材料としては敬遠される傾向があったように思う。本書はこれまでの分類学的研究の集大成といえるものであり、ここでまとめられた内容は今後の分類学的研究だけでなく、この分類群を対象とした進化・生態学的研究も大きく発展させていくと思われる。

(岩崎 貴也，東京大学大学院・総合文化研究科・特任研究員)



## 日本帰化植物写真図鑑 第2巻

植村 修二・勝山 輝男・清水 矩宏・水田 光雄・森田 弘彦・廣田 伸七・池原 直樹／編著  
全国農村教育協会／発行 ISBN:978-4881371558  
定価 5,000 円+税 B6 版 580 ページ

オオハンゴンソウ、ミズヒマワリ、アレチウリ、ボタンウキクサなど 12 種の帰化植物が特定外来生物に指定され取扱が規制される一方で、わが国への帰化植物種の侵入は歯止めがかからず、年間 30 種のペースで増加しているといわれています。本書は 2001 年に刊行された「日本帰化植物写真図鑑」の続編にあたり、前巻に未記載の新報告種を中心とした帰化植物約 500 種がカラー写真とわかりやすい解説とともに収録されています。2 巻合わせると約 1,100 種の収録となり、わが国の帰化植物のほとんどを網羅するほどのボリュームです。

パラパラとページをめくってみて、あまり見かけない種が多いなと思っていたのですが、前に道北の牧草地の縁で見かけたスマシレが、本書を参照して「マキバスミレ」であることがわかりました。またほんの数ヶ月前、一般からの植物の照会の際にも、本書参照の結果「ヌカイトナデシコ」と無事に回答することができました。仕事柄、自ら植物を同定し問い合わせにも対応する必要がある人には、本書は欠かすことができないと痛感した出来事でした。今でこそものめずらしい本書記載の種が、日本のあちらこちらで見かけられるようになる日も、そう遠くはないのかもしれない。

(東 隆行，北海道大学植物園)





